perplexity

Perplexityがもたらす知財実務のパラダイムシフト

Computer & Personal Computerによる機会、脅威、そして次世代知財戦略

進化

回答生成ツールから「自律型ワークフロー実行エンジン」への転換

両面性

劇的な生産性向上（機会）と、ローカルデータ連携が招く致命的リスク（脅威）

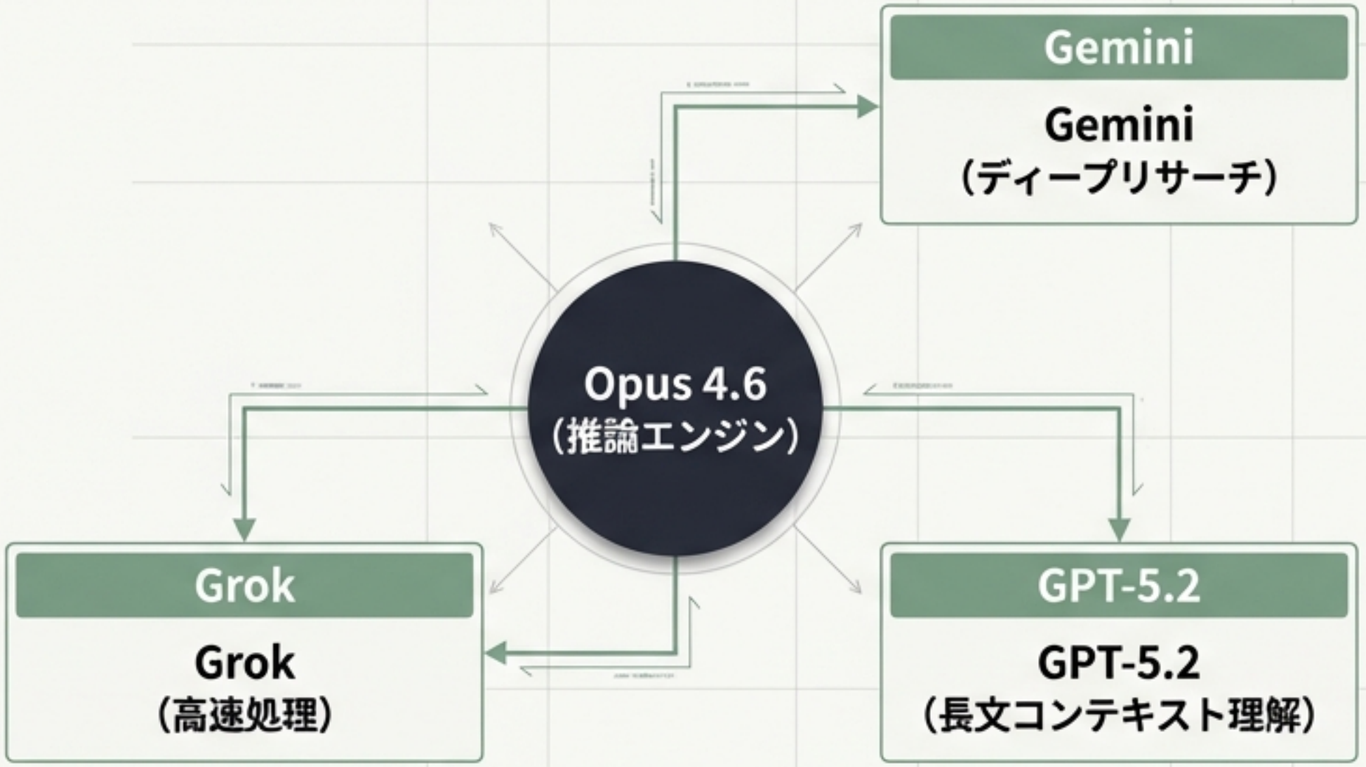
急務

「AI vs AI」時代に向けた、人とAIの境界線の再設計

単一モデルから「マルチモデルオーケストレーション」へ

> Musicians play
> their instruments,
> I play the orchestra.

AIは「回答」するフェーズから、自律的にツール（ブラウザ、外部API、ファイルシステム）を操作しタスクを「完遂」するフェーズへ移行した。



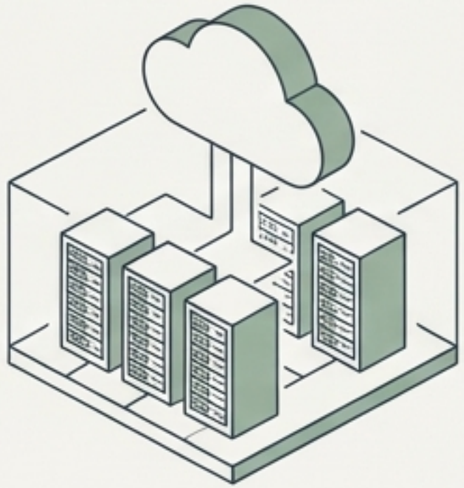
16,000件
処理した複雑なクエリ数

3.25年分
わずか「4週間」で完遂した業務量相当

$1.6M
削減された社内人件費（約2.5億円）

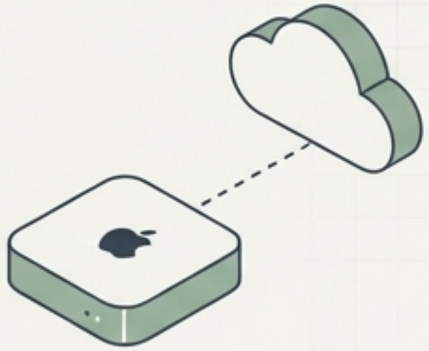
製品アーキテクチャの対比：クラウド基盤 vs ローカルハイブリッド

Perplexity Computer (Cloud)



- **公開時期:** 2026年2月
- **コア機能:** 19の最先端モデルを統合したクラウドエージェント。
- **統合ツール:** リアルタイムWebブラウザ、CLI、ファイルシステム、永続メモリ。

Personal Computer (Local/Hybrid)



- **公開時期:** 2026年3月（Ask 2026）
- **コア機能:** 専用Mac miniを「AIの物理的拠点」とし、24時間365日稼働（Never Sleeps）。
- **連携網:** Notion、GitHub、Slackなど400以上のデスクトップアプリとローカルファイルに直接アクセス。
- **セキュリティ:** 監査ログ保持、キルスイッチ装備。

機会①：エンドツーエンドの自律型知財ワークフロー

Before（従来の手法）

クエリ作成と反復 → 文献の手動収集と要約 → 証拠パックの手動整理

After（自律型エージェント）

Prompt → 【1. 特許DB横断検索】CPC/IPCコードへの自動マッピング → 【2. 文献収集と要約】セマンティック検索による構成要件別差異抽出 → 【3. 証拠パック生成】監査可能な形式での検索ログ自動生成 → 【4. 自動出願依頼文作成】構成要件に基づく下書き生成 →

40~60%
クエリ反復時間の大幅な削減

90%
出願依頼文作成の短縮事例（日本の大手製造業、従来15時間からの短縮）

能動的抽出
ローカルの技術メモ・試作レポートからの発明候補の自動構造化（Personal Computer機能）

機会②：中間応答（OA）の劇的なコスト最適化

特許出願の86～90%が初回OAを受け取る現状において、生成AIの活用は知財コスト最適化の最重要レバーとなる。

KPI Dashboard

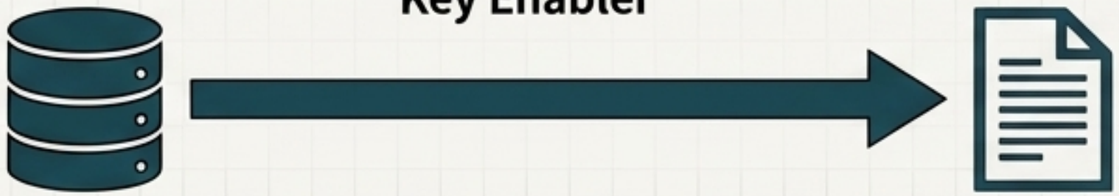
応答書ドラフト（シェル）の
作成速度向上

OA対応の全体的な作業時間削減

記載不備の44%削減に伴う、
OA発生件数全体の低下

Key Enabler

永続メモリ
(Persistent Memory)



審査履歴の蓄積により、複数回のOA対応においても一貫した反論戦略と文脈を維持したドラフト生成が可能に。

脅威①：ローカルアクセスが招く致命的な機密漏洩リスク

Personal Computerはローカルファイルシステム全体にアクセス可能。
未公開情報が意図せずクラウドのAI処理に吸い上げられる危険性。

新規性喪失

クラウド送信された未公開データが外部利用され、特許が無効化される。

営業秘密の漏洩

ローカルファイルへのAIアクセスによる関連技術秘密の意図せぬ収集。

守秘義務違反

日本弁理士会（JPAA）ガイドラインβ版抵触。パブリックLLMへの未公開情報投入は、懲戒処分リスクに直結する。

脅威②：ハルシネーションと発明者適格性の法的な地雷原

Track 1: Hallucination Cascade

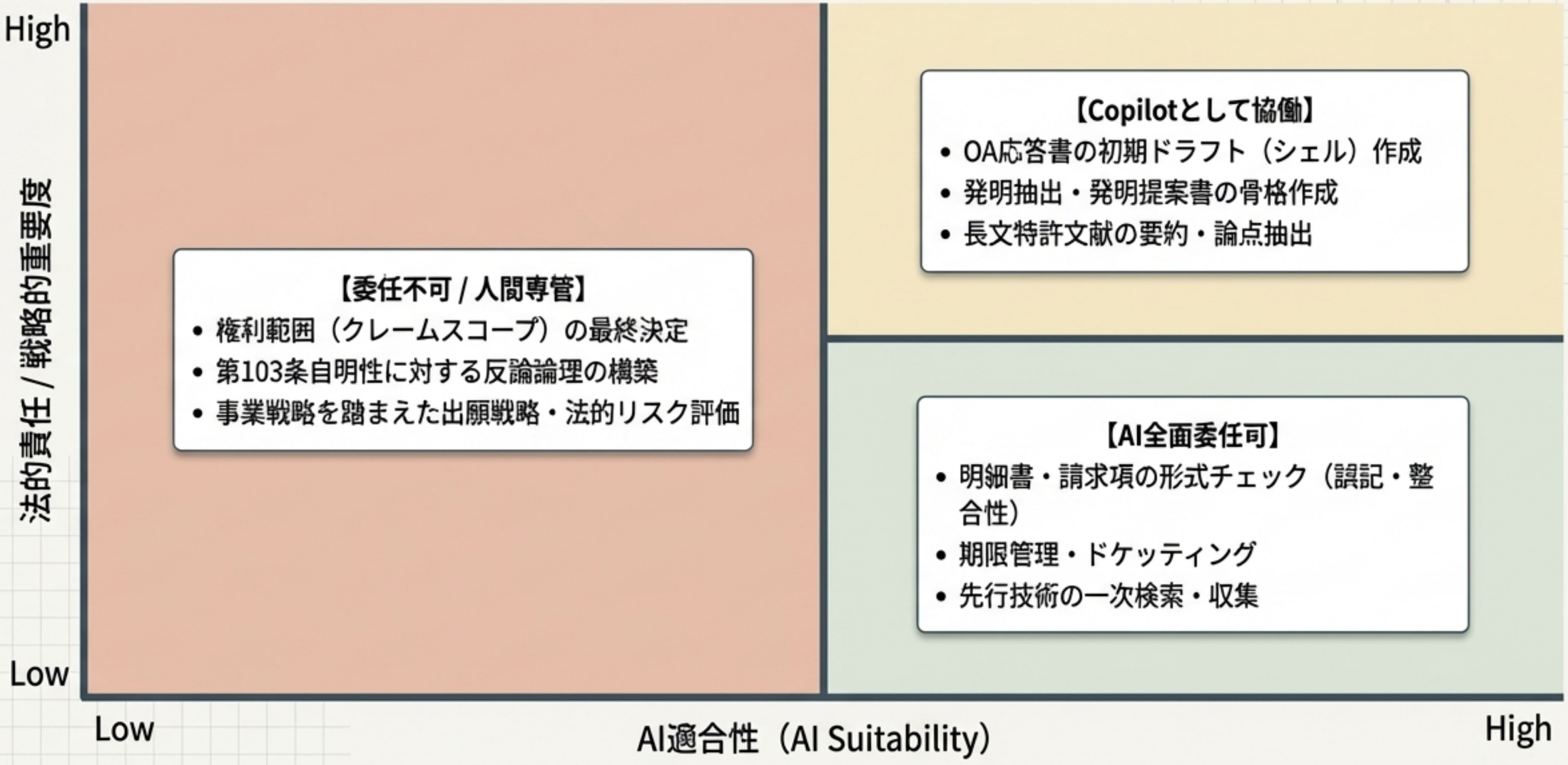
AIによる架空の先行技術・条文の捏造 → そのまま応答書として提出 → 不正行為（Inequitable Conduct）認定による特許権行使不能

Track 2: Inventorship Cascade

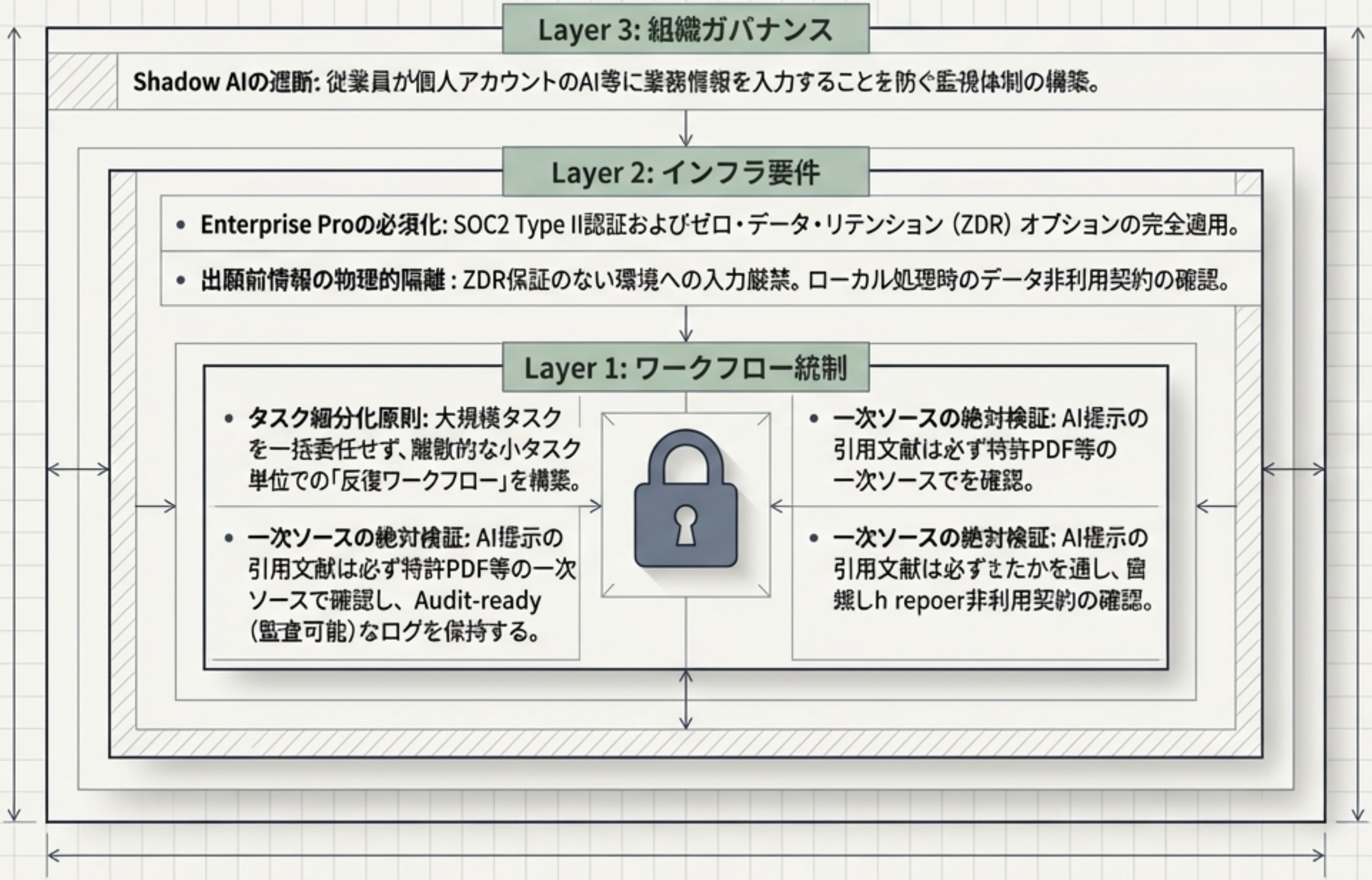
AIが自律的に技術的補正案を提示 → 機械による「着想(Conception)」の混入 → USPTO 2025年ガイダンス違反 / 無効審判での脆弱性

USPTOは、AI生成物であっても提出書類の法的・倫理的要件を確認し署名する『人間の実務家』が最終的な全責任を負うことを明言している。

実践的最適解：タスク委任（Delegation）マトリクス



セキュリティとワークフローの堅牢な再設計



「AI vs AI」の非対称戦：なぜ導入をためらえないのか

審査側のAI武装 - The Examining Side

- USPTOは既にAI自動検索パイロット「ASAP!」（2025年10月～2026年4月）を実施中。
- 審査官がAI（SCOUT，SimSearch）を日常利用し、網羅的な引例発見能力が急激に向上。

出願人側の競争要件 - The Applicant Side

- 米国企業の生成AI活用率は95%。段階的統合は「選択肢」から「競争上の必須要件」へ。
- 旧来の手法に依存することは競争劣位に直結。量的処理の効率化で生まれた時間を、高度な「特許戦略の立案」に再配分せよ。
- 自社のAI活用ノウハウ自体を「営業秘密（Trade Secret）」として保護する視点が重要。

Strategic Insight

自社のAI活用ノウハウ自体を「営業秘密（Trade Secret）」として保護する視点が重要。

今後の展望 (2026-2028)：エージェンティックAIの行き着く先

APIによる特許庁直結

Perplexityの4つの新API（Search, Agent, Embeddings, Sandbox）を通じ、特許庁システムと出願人AIが直接連携するアーキテクチャの確立。

AI vs AIの自律交渉

出願人AIエージェントと審査官AIツールが、クレーム範囲を半自律的に協議・調整する実験的枠組みの誕生。

三位一体の戦略分析

Perplexity Finance機能との統合により、競合の「特許ポートフォリオ」と「事業・財務指標」を掛け合わせた高度な知財インテリジェンスが自律化。

**「AI支援特許起草ツール市場は2033年に向けて3倍規模に急拡大する。
ルーティンを極めたAIを『戦略的パートナー』として迎え入れ、人間の専門性を
最高度な判断領域に集中させる者だけが、次世代の知財実務を制する。」**